令和６年３月２５日
今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会（第10回）
資　料　4

今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会資料
令和 6 年 3 月 25 日

言語能力と情報活用能力にかかる５つの問い

文教大学教育学部
藤森裕治

１．2030 年代を見据えて、学習指導要領改訂時からの言語能力をとりまく環境の変化をどのように捉えるか。

○ SNS における誹謗中傷、学校内外でのネットによるいじめなどの社会問題が収まる気配を感じない。匿名性に乗じて卑劣な行為をする者には、自らの行為がどのような結果をもたらすことになるのかを**想像する態度・能力の欠如**がみられると考える。

○ ChatGPT に代表される生成 AI を学習活動で用いるケース（例えば生徒作文のモデルや教材テキストの主旨を生成 AI に制作させたり、探究課題を生成 AI に求めたりするケース）が一般化する。これらは実在の教師・級友との交流によるものとは別の文脈から、大規模なデータをもって学習者に考えるヒントを与えることになるが、**学習者自らが「問い」を立てたり、予測不可能な事態に直観的に対処したりする能力とは別次元にある**ことに注意しなければならない。

○ 新型コロナ感染症の流行によって途絶えた対面による諸活動のうち、年齢や環境の異なる人との間で交わされる生身のコミュニケーションが十分に復活していない。少子化と大都市への人口集中に歯止めがかからず、地方の過疎化・高齢化が急速に進む現状にあって、地域コミュニティの維持が難しくなっている。**地域の教育力が脆弱化し、言語文化を支える社会組織・年中行事・伝統儀礼等が消滅しつつある現状**に危惧を覚える。

２．現行学習指導要領に基づく「言語能力」のあり方について検討が必要な点は何か。

視座転換・批判的思考・自己制御を支える想像力

○ 「想像する能力の欠如」がもたらす諸問題への対応として、以下に示す事項が相補的にかかわる言語的資質・能力の措定と育成が求められる[1]。

〔知識・技能〕既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解

〔思考力・判断力・表現力等〕

【創造力・論理的思考】妥当性、信頼性等の吟味

【感性・情緒】言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力

【他者とのコミュニケーション】相手の心の想像、意図や感情の読み取り

〔学びに向かう力・人間性等〕自分の感情をコントロールして学びに向かう態度

[1] 言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ(文部科学省, 2016/9/12)より引用（以下同じ）

自ら問いを立て新しい状況を構造化する創造力

○「学習者自らが『問い』を立てたり、予測不可能な事態に直観的に対処したりする能力」の開発と成長に向けて、以下に示す事項が相補的にかかわる言語的資質・能力の措定と育成が求められる。

〔知識・技能〕言葉の働きや役割に関する理解（言葉の創造性）

〔思考力・判断力・表現力等〕

《考えの形成・深化》情報を編集・操作する力／新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

〔学びに向かう力・人間性等〕言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度

文化の継承者・創造者としての自覚を支える態度

○「言語文化を支える社会組織・年中行事・伝統儀礼等が消滅しつつある現状」への対応として、以下に示す事項が相補的にかかわる言語的資質・能力の措定と育成が求められる。

〔知識・技能〕言葉の位相／言語文化に関する理解

〔思考力・判断力・表現力等〕

【他者とのコミュニケーションの側面】➢言葉を通じて伝え合う力

《考えの形成・深化》新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力

〔学びに向かう力・人間性等〕言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度／歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化の担い手としての自覚

３．上を踏まえた「言語能力」を育成する観点から、国語科・他教科等で検討するべき点は何か。

述語的統合の思考的態度によって汎用的言語能力を育てること

○ 視座転換・批判的思考・自己制御を支える言語的想像力などの資質・能力として、**異なる対象同士を述語性でつなげる思考的態度**（以下、述語的統合）が重要と考える[2]。述語的統合とは、たとえば『ごんぎつね』（新美南吉）を読んだ読者が、S1 と S2 の解釈にある下線部の共通性から、S3 の解釈を導く思考をいう。

S1:「ごん」はひとりぼっちだ。

[2] 藤森裕治(2023)「汎用的言語能力と述語的統合：学校教育目標と国語科教育学研究の架橋」第 144 回全国大学国語教育学会（島根大会）課題研究発表

S2：「兵十」はひとりぼっちだ。

S3：「兵十」は「ごん」だ。

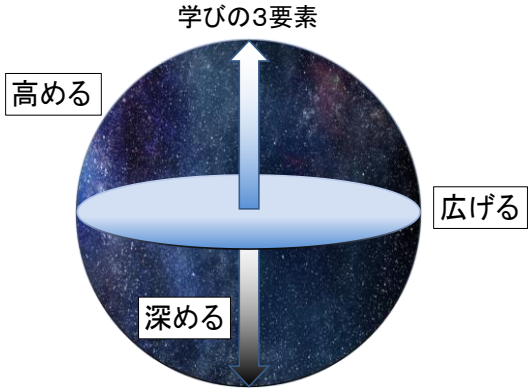
このような思考がもつ効果について、中村雄二郎は次のように指摘する。

> 述語的同一性による思考は、主語的同一性にもとづく通常の論理によって統一されている現実を問いなおし、惰性的に統一された総体に亀裂を与え、それをばらばらに分解する力を持っている。（中村, 1998『述語的世界と制度』岩波書店: 40）

述語的統合は、既存の論理にもとづく枠組みを別の視点から眺め、当たり前と考えていた事柄の妥当性や信頼性を吟味し、自己の思い込みや衝動を制御する姿勢を促す。それによって豊かな想像力を育み、教科・領域の枠を超えた学びの存在を自覚させる。

球的充実[3]として「問い」の力を育てること

○ 自ら問いを立て新しい状況を構造化する言語的創造力は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための課題探究力にとって、必須の能力と考える。「深い学び」には、**広げる学び・深める学び・高める学び**の３方向性があり、対応する「問い」は、それぞれ「拡散的な問い・真理追究的な問い・創造的な問い」を構成している。これらの相互作用によって、学習主体の言語的資質・能力は膨らんでいく。身近なところでは、説明的文章を理解する授業において、以下のような視点を交差させて素材を捉える学びが一例として挙げられる。



広げる：筆者は事実をどのように集め、提示しているか。それは正確で必要十分か。

深める：筆者は事実をどのように分析し、考察しているか。それは妥当で適切か。

高める：筆者はどのような発見や解決策を示しているか。それは同意できるか。

このような視点で素材を捉えるとともに、学習者が「筆者」を自分自身に置き換えることによって、課題探究型の学びが実現すると考える。

年長者や異文化生活者と積極的にかかわるコミュニケーション能力を育てること

○ 少子高齢化が急激に進み、地域コミュニティや伝統文化の維持がますます難しくなっている一方で、インバウンドや外国人労働者は増加の一途をたどり、大都市圏は多民族国家の様相を呈している。かかる状況の中で、次代を担う学習者には、自分のテリトリーとは異なる世界に生きる年長者や外国籍の人々との積極的で共生的なコミュニケーションを

[3] 藤森裕治(2018)「なぜ『主体的・対話的で深い学び』が求められたのか：自己組織・相互作用・球的充実の視点から」『日本語学』37(6), 2-13.

はかる能力が求められることになるはずである。この点についてジェフ・バーグランド（京都外国語大学教授）は、54 年にわたる京都文化とのふれ合いを通して、日本人のコミュニケーション能力の特性を以下のように指摘している。

> コミュニケーションは発信と受信で成り立つものであり、日本人が長年極めてきたのは後者、「受信力」の方です。……どんなに曖昧な表現であっても受信者にそれを解読する責任がある。……異文化コミュニケーションの教科書でも、日本は世界で一番の“High Context”すなわち一番の受信者責任型コミュニケーションと紹介しています。だから「日本は世界一のコミュニケーション力」を持つというのは正しいと言えます。……そんな受信力が日本の平和を作っていると思っています。（バーグランド, 2024, 「日本人のコミュニケーション」, 『これからの国語科教育はどうあるべきか』, 東洋館出版社: 95）

氏の指摘にもあるように、受信力すなわち**多様な他者の声を「聴く力」としてのコミュニケーション力**が、今後ますます重要な言語能力になるだろう。

4．情報活用能力と言語能力の関係についてどのように捉えているか。

○ 日本国語教育学会研究部（部長・藤森）では、2022～2023 年度の研究テーマを以下のように設定し、これまでに 4 回の全国公開研究会を企画・開催してきた。

研究テーマ：言語生活の豊かさと「情報」

キーワード：言語獲得、論理的思考力、クリティカル・リーディング

理論研究：新学習指導要領の〔知識及び技能〕で新たに設置された「情報の扱い方」を切り口にして、「情報」という用語の理論的な措定を図りつつ、言語生活が豊かになるとは学び手の言葉における資質・能力がどのように変容することを意味するのかという問題について、有識者の知見を交えて探究する。

実践研究：さまざまな教育実践場面において言葉の学びに対する子どもの自覚をどのように育てるのかという問題意識について、実践開発とその分析とを行う。

2022 年 10 月 23 日、上のテーマに基づき、乳幼児教育・学校教育・メディアリテラシーの専門家によるシンポジウムを開催した。その中で、次のような知見が示された。

○【乳幼児教育における言語能力と情報】赤ちゃんにとって、「情報」の乗り物としての言語獲得は試行錯誤の繰り返しによってなされるいとなみである。重要なのは、<u>大人がどれだけ積極的に赤ちゃんにかかわるか</u>という点であり、大人(特に母親)の言語的な介入が多い赤ちゃんほど、語彙の獲得数や音分布の識別能力、文法的知識・技能に正の効果が現れている。（東京大学・針生悦子氏による）

○【学校教育における情報の扱い方】現行学習指導要領では、国語科の指導事項〔知識及び技能〕に「情報の扱い方」が項目として新設され、下表の指導事項が示されている。

		情報と情報の関係	情報の整理
小学校	1,2年生	共通と相違、事柄の順序	
	3,4年生	理由や例示、全体と中心	比較・分類、引用・出典
	5,6年生	原因と結果	関係付けの仕方、関係の表し方
中学校	1年生	原因と結果、意見と根拠	比較・分類、引用・出典
	2年生	意見と根拠、具体と抽象	関係の様々な表し方
	3年生	具体と抽象等	情報の信頼性
高等学校	現代の国語	主張と論拠、個別と一般	推論の仕方、情報の妥当性・信頼性、引用・出典
	論理国語	主張と前提・反証	情報の階層化、推論の仕方についての理解を深め使う

このうち、特に重要と思われる事項の 1 つは「引用・出典」である。①その情報がどこからどのようにして得られたのかに注意を払い、②真偽・適否等の観点から批判的にこれを検討し、③著作権や個人情報保護に留意しながら、④引用された情報源を適切に示す知識・技能の育成が求められる。（早稲田大学・幸田国広氏による）

○【社会生活におけるメディアとしての情報】言語は「情報」の乗り物すなわちメディアである。ただしそのメディアは音声・映像などと複合し、マルチ・モーダルな状態で使用されていることを自覚する必要がある。そして、こうしたメディアそのものがメッセージ性をもった「情報」の乗り物であることを理解し、さまざまな事象をクリティカルに捉える目が求められている。（桃山学院大学・土屋祐子氏による）

5．個別最適かつ協働的な学びを通して、主体的・対話的で深い学びを推進するための資質・能力観、カリキュラム・マネジメント観は、どのように定位すべきか？

○【しなやかなマインドセット（Growth Mindset）[4]】

① 失敗を怖れずに挑戦し、失敗から学び、時間をかけて難問に取り組むことに歓びを感じる粘り強さ。

② 人の才能は固定的でなく、本人の努力次第で伸ばすことができるという信念。

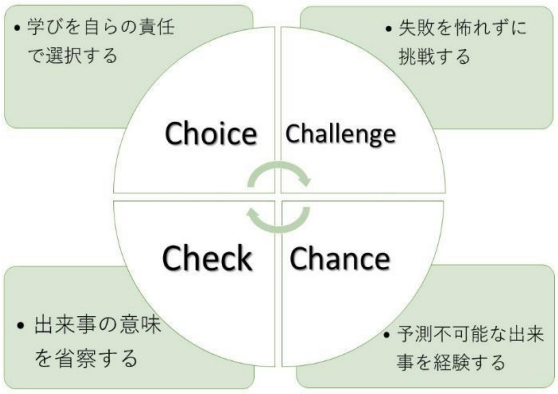
③ さまざまな体験から学び、学んだことを省察し、自らの成長が止まることのないように生きようとする態度。

④ 他者と共同し、相互理解を深め、隣人を尊重し、手厳しい批判にも謙虚に耳を傾ける姿勢。

⑤ 自分をかけがえのない存在と認識し、変化と流動に満ちた人生を前向きに歩もうとする意志。

[4] Dweck, C S.2017. *Mindset: Changing The Way You Think To Fulfil Your Potential.* New York: Robinson.

○【4CH モデル】



選択：Choice

「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりにあたっては 、学習者が自らの学びを選択する自由が保証されている場を必要とする。学習者は、当面する学びがどのような状況にあるかを観察し、自分はどのような学びを選択する余地があるのか判断し、どの学びを進めるのが適切かを決定する。それによって、彼らは当面する学びに責任をもつことになる。

挑戦：Challenge

学びはつねに主体的に組織され、成長への挑戦として実行される。学習者には、学ぶ勇気と自信、失敗を怖れずに難問に取り組もうとする姿勢をもつことのできる励ましが必要となる。挑戦には失敗がつきものであり、試行錯誤を重ねる場面が何度も訪れる。こうした困難に立ち向かう努力そのものに価値がある。このことを実感するためには、学びの共同体が一体感を持っていること（Co-agency）、互いに信頼していること（Trust）、そして誰も置き去りにされていないという安心感に満たされていること（Everyone）が求められる[5]。

経験：Chance

相互作用的・協働的な学びが実現している場において、学びは常に主体の予期や予想を越えた事態を伴って展開する。それは、計画されたプログラムの出力では絶対にない。すべてが状況的な出来事である。主体の予期や予想を裏切る出来事は、しばしば主体に葛藤や混乱、失敗や挫折といったネガティブな作用をもたらすが、その中には例外なく成長への契機となるべき要素が含まれており、これと真摯に正対することによって、主体はたくましさ（resilience）を手に入れる。

省察：Check

省察は自分が何を経験したのかという観点から出来事を振り返り、今後に向けて継続すべき要素は何か、修正・改善すべき要素は何か、そして新たに創造すべき要素は何かを冷静に問う行為である。これについては PDCA サイクルの Check とほぼ同じ意味である。ただし、省察による価値判断は、うまくいったかどうかという結果を基準に行ってはならない。たとえ拙劣な発表しかできなかったとしても、テストで及第点を取ることができなかったとしても、大切なのはどういう努力をしているかである。

【補足資料】参照

[5] Peacock, Alison. 2016. *Assessment for Learning without Limits*. UK: Open University Press.